

室生犀星

憶 芥川龍之介君



憶おも

芥川龍之介君



「新潮」の芥川龍之介研究という座談会の記事を読んで、久米、広津の両君の芥川観が大変に面白かった。時は芥川君の好んだ梅雨の季節であるし、何となく芥川君のことを考えていると、「文芸春秋」から芥川君の思い出を書いてくれとのことであつた。度たび追想記を書いたから今度は何を書こうか知らと、床に就いてからうつらうつらと考えていたが、茶棚の上に今朝ほど小林古径さんのお嬢さんから、家の娘におくられた近江の琵琶湖

の大蛍が白い蚊帳ごしに、明滅しながら燐のような光を放っているのを眺めた。籠が大きいので、立ったり落下したりする鋭い光芒が、陰陰として美しいというよりも妖しく、妖しいというよりも怖いような気がした。家人は睡り私と蛍だけが家のなかに起きているようなものである。芥川君の最後に近い作品にある鬼気妖気の類が、この蛍の光のなかからも分かれて入っているような気がし、私は容易に睡ることが出来なかった。

金沢に芥川君が来たのは大正十三年の五月も終わりに近い頃で、兼六公園の翠滝の上にある三由庵別荘に俳人

桂井末翁さんの紹介で案内したが、老楓、古松の間にあるこの別荘はうす青い蚊帳のなかにいるような空気が昼間も十二畳の部屋を一杯に領していた。南蛮舟入港の六曲折の前に跼んで見ている芥川君はううむと一つ唸り、又ううむと唸り、心臓の脾弱い人のように、しまいに、はあ、はあと荒い息をつき出した。「金沢には佳い物があるなあ、こりや佳いなあ。」と感嘆して言っていた。

晩に町の北間屋というお茶屋で夕飯をたべてから、おそく三由庵に戻って行つたが、自動車くるまには帽子シャツポという名前のおんな妓おんなに、仙吉という名前の妓とが同乗していた、そ

んならお部屋だけ拝見してゆくわいなと言って、暗い公園の迂曲した松の根上がりで凸凹した小径を登って行つたが、提行燈さげあんどんの明りも乏しい闇のなかで芥川君は長い髪を額に下げて、わあ！ と叫んで女の前に立ち塞って脅かしたが、彼女らは五位鶯の夜啼きのような鋭い声できやあ！ と叫んで逃げたりした。

「帽シヤツポ子シヤツポという妓は薄命らしい顔をしているね。一体、帽シヤツポ子という名前を付けるなんてみずあげした奴も奴だが、はかないなあ！」

芥川君は長嘆息をしたが、妓こどもは先刻さつぎほど喫驚した

ことがなかつたと云い、ずっと後まで胸を悸きつかして  
いた。

帰路を京都に取った芥川君から、帽子シヤツポさんに長い手紙  
を送って健康に気をつけるよう呉々も注意し、京都の妓  
どもも二三人の署名までがしてあつた。余程弱そうな健康  
が気になったものらしかつた。帽子シヤツポは芥川没後三年目に  
肺で亡くなり、仙吉というのも帽子シヤツポと前後して哀れに死  
んでいた。

僅か三四日間の滞在ではあつたが、金沢の方言に非常  
な興味を持ち、僕もとうに忘れていようような言葉を何時

の間にか覚えて、歌に詠みこんだりしていた。金沢川岸町の仮寓を訪ねて来た芥川君は長い川べりの土手を人力車に反り返って乗っていて、色の白い優形の姿は鳥渡医科大学を卒えたばかりの若い開業医のように見えた。菓子折くらいの小さいトランクに僅かな手廻り品を入れた彼は、身軽に旅をする「五月の貴公子」のようであった。

田端の芥川君の家と私の家とは裏通りから坂二つを横に通って、五六町くらいしかなかった。仕事にも草臥れて芥川君を訪ねて元気な顔を見ようと出かけると、そん

な時分、向うからも少し温かい日でもマントをふうわりと被った、なりの高い彼は漂々乎として歩いて来るのであつた。今君のところへ行こうとして来たんだという、僕も君のところへ行こうと思つて出かけて来たんだと立ち止つて何やら相談するようなふうで、結局、距離の近い方に行くことになるのであつた。僕の家、潜り板戸は開けるとかたんと音がして、鳥渡開けにくかつた。芥川君の戸の開け方は不器用で二三度かたんかたんと音をさせるので、すぐ龍之介入来であることが判るのであつた。「やあ。」という彼は弱っている時でも、病気をこ

ぼしている時でも、何所か経文を誦む時のように鼻にかかった声は何時も張り切って、気魄的に甚だと云つても好い位元気だった。

「菊池寛がね君、この座敷から離れまで飛石に雑巾がけをさせて、ぺたぺたと離れまで素足で行ったものだよ。どうも敵わん男だよ。」と私が金沢へ行く前に明け渡した貸家を菊池君が住み、庭下駄を引っかける手数をはぶいた菊池君のことをこう彼は話していた。

「菊池君がね君、こんど雑誌を遣るんだよ。旨く遣れたら原稿料を皆に払うんだというんだが、菊池のことだ

から旨く遣るかも知れないよ。」この話があったから「文芸春秋」が生まれて、今日の雑誌になったのであった。

それから小穴隆一君の名前が大抵の場合に話の間に飛び出していた。小穴が小穴がと云い、小穴がとうとう足を一本切ってしまったって僕が手術に立ち会ったのだよ。小穴に君の字が旨いと云ったら、室生犀星にだって旨い字が書けるなら、おれも習字して遣ろうと云っていたよ。小穴の妹が死んだんだよ。この間小穴は弱っていたよ」とよく云っていた。

「小穴が君の庭の玉笄ぎぼし花を写生に行くかも知れんよ。

関わなくとも好いから写生させて遣つて呉れよ。それから小穴はきみの奥さんをモデルにするかも知れんが、それも頼めないかなあ。——小穴がね、こんど画会を起すんだよ、いろいろな人に這入つて貰うより君ひとつ入はい会つて遣つてくれんかな、一口四十円だよ、まだずっと先のことなんだがね。」と云っていた。

或日芥川君をたずねると、君、きのう奥さんが僕のことを変な男だとか何とか云いはしなかつたかねと尋ねた。君に途中で会つたと云っていたけれども別に何も云わなかつたと云うと、そうか、実はね郵便局の前あたり

で猿又が下って来てね、こいつは大変だと懐中から手を入れて猿又を引き上げながら歩いていると、奥さんにはったり出会したんだよ。急に慌てて了った訳なんだ。そうか、気づかなかったのか、そりや宜かったと安心して云っていた。家に帰ってこの話をすると、道理で容子が可笑しかったと女房が云っていた。

これも或日のこと、僕の部屋でこの間の葡萄酒がまだあつたら、少し呉れんか。あれは旨かったよといい、グラスで出した白ぶどう酒を芥川君が甘味そうに、ほんの少量ずつ舌の先で舐めていた。あとさき十年芥川君がう

まそうにお酒を呑んだのを見たのが、始めてであった。

或時、金沢から持って来た木越三右衛門の鉄瓶をじつと見てから、「ああ、好い鉄瓶だ、文壇斯くのごとき鉄瓶を持っている者は先ず君一人だろうね。」と感嘆して云った。或時、岸田劉生氏の絵を上野で見てから、「そう、そう、君がこの絵の好きな訳がわかったよ。朝子嬢に肖ているからだよ、やあ、全く肖ているなあ——。」

或時、梅原龍三郎氏の木立と池のような構図の絵を見て、旨いなあ、これが君に分らんとするのは、君はてんで絵を解ろうとしないんだと云った。絵を解ろうという

所まで僕はいつも行けないで、途中でぶらぶらしていたらしいのである。——或時、道坂町の汁粉屋で汁粉を二椀たべてから、どうだこの汁粉は旨いだろう。この界限にこのくらいの汁粉は稀だろうと甘い物の好きな彼は褒めに褒めていた。だがね、金沢の森八の汁粉というのも鳥渡うまかったよ。金沢はお菓子がいいよと彼は二百年の伝来名菓を看破していた。

芭蕉も思い付きで作った句が相当にあると私がいうと、いや、そんなことは絶対にないと憤然として食って懸った。写生の句なんかすらつと詠んでいるじゃないか

と云うと、いや何度も置き換えていると云って、例句を引用して却々聞かなかった。

芥川君はよく一緒に「中央公論」などに書く場合に、今月は君と合乗りだよと云っていた。合乗りとは面白い言葉だと思った。そして僕の方が何時も先に書き、芥川君はずっと遅れていて、瀧田樗蔭氏は昨日三枚きようは午前中に三枚は出来る筈ですと、そういう長い時間のかかるのを楽しそうに云った。

瀧田樗蔭氏はよく芥川君とかけ持ちで、私の家に見え

られたが、いま芥川さんの所に寄ると四月号ならちやんと取って置き材料があると云われていたが、芥川さんらしいですねと瀧田氏は嬉しそうに話していた。瀧田氏は芥川君の話をするとき、何時もほくほくと嬉しそうであつた。ああいう機嫌の好い時に嬉しそうにする人を、今まで見たことがなかった。「芥川さんの原稿は手垢でよごれているんですよ。ところどころ継ぎ張りがしてあつてね。」こういう瀧田氏は甚だ機嫌美わしかつた。

芥川君は平常喋る言葉に大体の用語が定っていた。彼はお辞儀するときとか、会った最初には決つてやあとい

っていた。「ありや君とても敵かなわん。」とか、「内田百閒の話聞いていると変になるよ。」とか、「あれは傑作だね。」とか、「僕は大きいに同情した。」とか、「ちよつと美人だね。」とか、「ありや豪傑だよ。」とか、「怖かったなあ実際」とか、——

軽井沢で同じ旅館にいたとき離れの部屋の前に、大きな楓の木があった。それを登ると松村みね子さんのお部屋が見えるという話が出て、芥川君は登ろうかと云って早や脚をかけようとしていた。私はのぼれ、のぼれと嗟しかけると、君、登れるかと云ったから、登れないとい

うと、よし登って遣ろうと脚の長い男だけにするすると登って行った。悪い時は悪いもので、松村みね子さんが廊下へ突然出て来て、ちよいと驚いたふうで見て居た。かれは下りると失敗った見られたと云っていた。

この間奥さんがお見えになり、家で湯の立たない日だったので私は銭湯に出かけて行ったが、芥川君が銭湯の話をした事がなかったので、帰って女房と話をしている奥さんに尋ねて聞いて見ると、銭湯が嫌いで行ったことがないそうである。鵜沼で一ト月お湯にはいらないうことがあったそうだった。軽井沢で一所に湯に入ると、毛深

くて僕よりも肥っていた。「ああ快い気持だ、風呂桶に犀星のいる夜寒かなはどうじゃ。」と彼は夜の明けたように薩張りした顔付でいった。彼はいつもオムレツを一皿とお椀のおつゆで膳に向っていたが、私は鮎や肉を彼の二倍くらい食べていた。「ああ、よく食う男だ」と彼はいい、僕は「何という少食の男だろう。」と感嘆して云った。それほど彼は少量しか食わず、所きらわずに足を捲って見せ、痩せたお腹を出して見せたりした。彼の胃袋がいつも胸のところの下っているような気がした。

何時か夜中に芥川君の近隣に出火があつて、出かけて

見舞いに寄ると、芥川君は玄関に仁王立ちになり、少し胸をはだけて見舞客に一々長い髪を搔き上げ搔き上げ、鄭重に挨拶を交わしていた。背丈が高いので玄関一杯に広がっている恰好は、非常に頼母しい主人振りであった。火事はもう済んだよ、ちよつと上って行って呉れ、ちよつとでいいからと云い、私は夜半の書齋には行って行った。あの晩ほど芥川龍之介を頼母しい男だと思ったことがなかった。もひとつは、震災当日午後四時頃、彼は振り返って背後に渡邊庫輔君を随えて、悠悠然として僕のところに見舞に来た。僕は今夜から自警団に出なければ

ならんよ、火事は全市に起っているらしいと云って戻って行つた彼はその時分それほど元気だった。

僕が或夏軽井沢に行くというと、芭蕉のことはおれが見て遣るといい、留守宅に行つて二三本の乏しい芭蕉の成長を見とどけた上、手紙に「芭蕉蒼然たり、幸に安心これあるべし」と書いて知らして呉れた。

何時も芥川君は何かに打つかっているような感じだった。相撲の打つかりのように眼に見えぬ敵に、また眼に見える敵に絶えず打つかっているようであった。仕事最

中に訪ねると芥川君の表情はまだかきかけの小説魔に取り憑かれたまま、平常の顔色に戻らない揉まれた顔をしている時があつた。お湯にはいらぬせいもあつたが、蒼白い細長い瘦せた指の爪にくろぐろと垢がたまり、怪鳥の爪のようであつた。鳥の眼はみんな美しい眼をしているが、芥川君のなかで就中眼が一番きれいであつた。怎麼忙しい時でも顔さえ見ればちよつと上れといい、また宴会の帰りなどにも、君ちよつと寄つてくれ、見せたいものがあるからと云つて離さなかつた。かれは人懐こいよい育ちをその最後まで持つていた。

亡くなる一月ばかり前の暑い午後にたずねて行くと、珍らしく椅子に坐っていたが、先客がかえった後で何か烈しい苛ついた疲労で、顔色はどす暗く曇っていた。その年の六月号かの「新潮」に私は芥川龍之介論を書いていたので、君あれを読んで呉れたかねと云うと、慌てて読んだよ、どうも有難うと云うかと思うと、たしか「湖南の扇」が出来ていたのでせかせかとそれに署名して呉れた。その時殆ど、聞こえるか聞こえないか位の独り言のような低い声で、ああいうものを書かなくてもよいのにと云った。私は書かなくとも好いというのは氣に入ら

なかつたのかというと、いや別に、いや何でもないよと、それきり黙り込んで了った。私はそれから間もなく信州に行き、その日が彼の人に永いお別れの日になったのである。



日本文学電子図書館

---

憶 芥川龍之介君

著 者：室生犀星

制作者：宮澤一郎

底 本：「芥川龍之介の人と作 上」  
三笠書房

昭和18年4月15日 初版印刷

昭和18年4月20日 初版発行

日本文学電子図書館